

B型肝炎ワクチンについての雑学

B型肝炎ウイルスの心臓部はその皮であるHBs抗原という部分で、このウイルスの皮に対する抗体ができれば、B型肝炎ウイルスはイチコロです。要するに、HBs抗原（皮の一部）がワクチンなのです。このHBs抗原を作るためのDNA（設計図）を酵母菌に植えつけて、酵母菌がこのDNA（設計図）をもとに皮の部分だけを作ってくればワクチンとして利用できます。これをリコンビナントワクチンといいます。要は、酵母菌はパンを作らず、ワクチンをせっせと作ってくれるので、本来大量生産に向いており安価に作成できます（なのに何で原価がこんなに高いのか不思議、..）

日本で取り扱っているB型肝炎ワクチンは

ビームゲン（化血研）とハブリックスII（萬有-メルク）の2つです。

ビームゲンとハブリックスIIの大きな違いは、その元となるワクチン遺伝子です。

上で述べた様に、植えつけたHBs抗原（皮の一部）を作るDNA（設計図）を元に酵母菌がワクチンを作ってくれるのですが、このHBs抗原のDNA（設計図）には微妙に違う4種類のもの（ジェノタイプといいます）があります。

ビームゲンは“adr”、ハブリックスIIは“adw”というジェノタイプのDNA（設計図）を元にワクチンを作っています。

アジア圏はadrとadw 2つの遺伝子を持つB型肝炎が存在し、adrは南側、adwは北側に多く見られます。型がピッタリ合うほうが免疫が強く反応しそうですが、adの部分で共通していれば、効果にさほど違いがないと言われております。

当クリニックでは少しこだわって、両製品とも在庫し、北部、南部で使い分けております。

日比谷クリニック 院長

[トラベルクリニックページに戻る](#)